

エリカと由佳

秋の日の夕暮れ。人通りの少ない、寂れた街角を由佳は一人歩いていた。

「近道になるかと思つて来てみたけど、ちよつと不気味なところね……」

こんな場所に長居したくないので、由佳はなるべく早足で通りすぎようとするが、そこに二人組の男が立ちほだかつた。

「よう、お嬢ちゃん。そんなに急いでどこ行くんだ？」

「ちよつと俺らと付き合つていかねーか？ 悪いようにはしねえからさ」

一人は金髪ピアス、もう一人は坊主頭に無精ヒゲで、どちらもダボダボのスポンを履いている。内心、うわあ、と思う由佳だったが、無視してその脇を通り過ぎようとする。だが急に伸びてきた手に腕をがっしりと掴まれてしまった。

「オイコラ、なに無視してんだ」

「せつかく俺らが下手に出てやつたつてのによお」

「や、やめてください！」

何とか振り解こうとする由佳だが、現実世界では華奢で非力な女の子に対し、チャラ男とはいえ男二人。ほとんど抵抗することも出来ずに、路地裏へと無理やり連れて行かれてしまう。そして、押し倒される由佳。

「ふへへ、チビのくせにいいおっぱいしてるじゃねえか。ちよつと俺にも採ませろや」

（だ、誰か助けて……！）

思わずギョツと目を瞑る由佳。

すると、願いが通じたのか、チャラ男たちの背後に一人の少女が現れた。セーラー服姿の、高校生くらいの女の子。

「その汚らしい手を離しなさい」

「あん？ 誰だてめえは！」

「私？ 私は通りすがりの魔導師よ」

そう言つて、少女は余裕たつぷりに、ウェーブのかかつた長い金髪をふわつと広げる。

「魔導師だど。そいつあスゲエな。おら、どんなマジックを使えるか見せてみるや」

「それじゃ、遠慮なく」

ご要望ならと、少女は不敵に笑うと、淡い光を発しながら何やら不思議な言葉を唱えていく。

「お、おい……なんかやべー感じだぞ」

「まさか、こいつマジモンじゃ……うわあああ」

そして次の瞬間、チャラ男たちはみるみる一センチ大の大きさへと縮んでしまった。

信じられない光景を前にも然とする由佳に、少女は手を差し伸べて優しく起き上がらせる。

「ふう。まったく、こんなにも可愛い女の子を襲おうなんて、いけない人たちね。大丈夫だった？」

「はい……。えつと、あなたは……」

「皇エリカ。魔法学院に通う、魔導師よ」

「すめらぎ……つて、あの有名な皇家ですか？」

「ええ、そうよ。今は昔の話だけどね。それで、あなたは？」

「私は由佳です。宮西由佳」

「由佳さんね。素敵な名前」

そう言つて、にっこりと笑うエリカ。

「それじゃ、挨拶も済んだところでこの小人たちを可愛がつてあげましょうか」

「え、いいんですか」

「本当は魔法を悪用しちゃいけないだけだね。でも、ちょっとくらいなら問題ない……かも。ともかく、あなたは襲われたんだから、やり返してあげてもいいのよ。もちろん、ほどほどにね。力の調節は出来る？」

「たぶん大丈夫です。……こんな事言うのは変かもしれないですけど、ゲームで小人たちの扱いは慣れていきますから」

「あら、奇遇ね。私もゲームというわけではないけど、ちょっとね」

そして顔を見合わせ、微笑む二人。

それから、彼女たちはこっそり逃げようとしていた小人たちに一歩で追いついて、まずは足で小突いたり、真横に思いつきり振り下ろしたりして怯えさせていく。

「ひ、ひい……」

「やめてくれえ！」

逃げられないことが分かったのか、チャラ男たちはすぐに土下座して助けを乞おうとするが――。

「だーめ♪ 絶対に許さないんだから」

すっかり立場が逆転した由佳は笑顔で言い放つて、楽しそうに彼らをいじめていく。金髪ピアスの方を有無も言わず摘み上げると、手のひらの上に落として、指先でグリグリ押さえつ

けたり。小人いじめにちゃっかり加わったエリカも、無精ヒゲの方を潰れない程度に甘踏みして、それから吐息で吹き飛ばしたり。

「た、助けて……」

「もう許して……」

「そうね、私に思いっきり踏まれて生きてられたらいいわよ」

最後に、由佳はすっかり気力を失った二人を路上に寝かせたところで、軽くジャンプして彼らの上に着地する。

「ぎゃああああ……」

グチャ。……とはならなかった。由佳は事前にエリカと申し合せて、こっそりと小人たちの身体を潰れない程度に強化していたのだ。もつとも、そのことを知る由もない彼らは巨大な靴裏が身体に触れた瞬間に恐怖のあまり気絶してしまっていた。あとは、エリカがチャラ男たちの大きさを元に戻して、証拠隠滅のため記憶を消せば、全ては完璧だった。

「今日は本当に助かりました。それに、貴重な体験もさせて頂けて……」

「気にしなくていいのよ。私も結構楽しめたし。ふふ、また機会があればよろしくね、由佳さん。それではごきげんよう」

そして二人は別れた。似た趣味を持つ彼女たちが再び会う日があるのか。それはまだ誰にも分からない……。

おしまい

誰かさんの要望があったので絡ませてみました(笑)